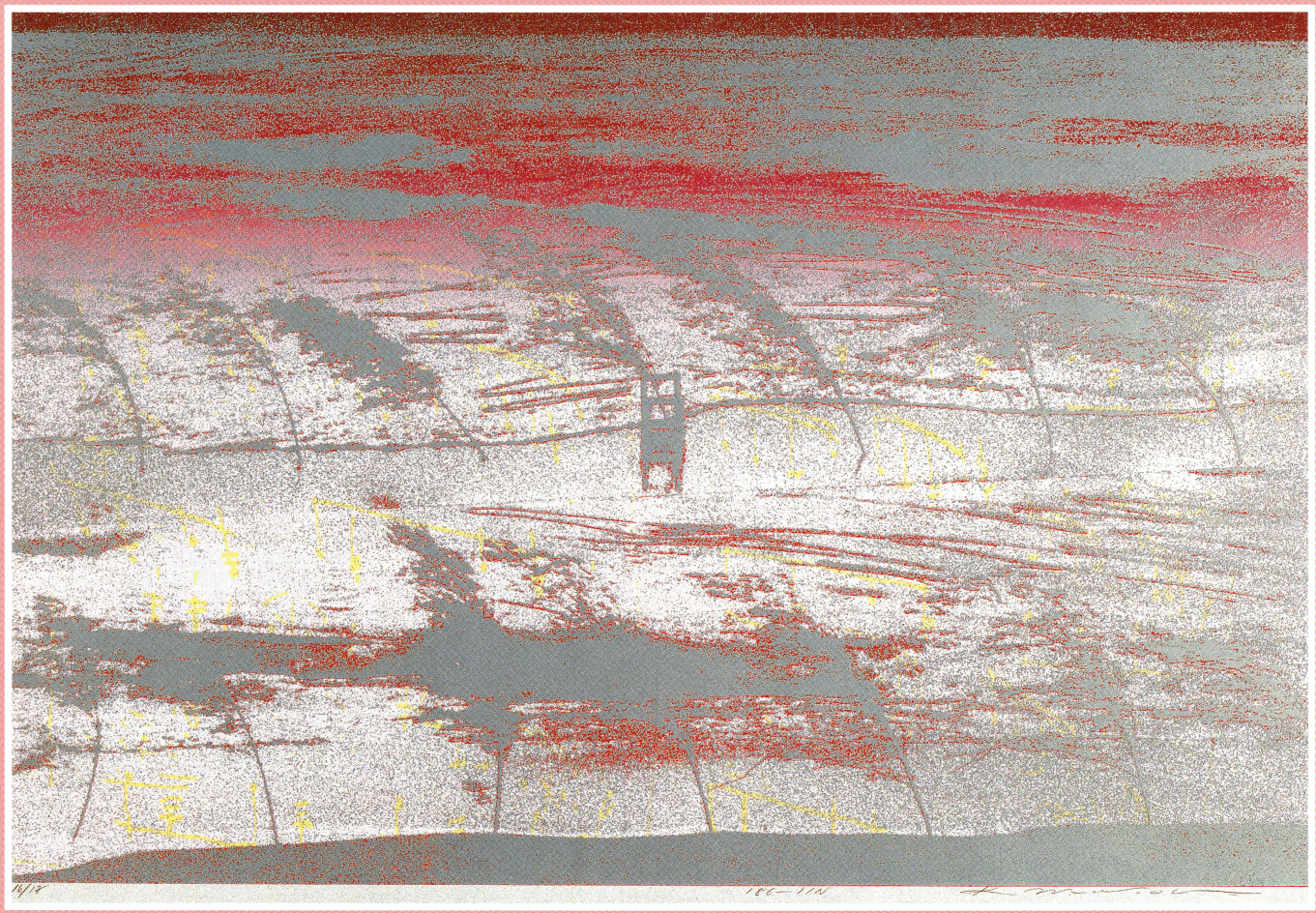
空中回廊

AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART　愛知県美術館友の会　会報　MEMBERSHIP　第 14 号



美術館支援の第一歩

作品寄贈のご報告

愛知県美術館友の会 事務局

これまで懸案であった「美術館支援」の具体的な形として、友の会会員の皆様にご理解いただき、初めて美術館へ作品を寄贈することができました。作家・作品については、会長ならびに事務局と美術館との協議の上選定しました。本号では、作家の方からのお便りもあわせてご報告します。

寄贈作品：森岡完介作

《人は何処へ 78-16》
1978年 シルクスクリーン 85.0×57.0cm
《Beethoven at the beach -Message 86-11P》
1986年 シルクスクリーン 70.0×105.0cm
《Beethoven at the beach -Message 86-11N》
1986年 シルクスクリーン 70.0×105.0cm

作品寄贈にあたって

愛知県美術館友の会 会長　宮崎 玲子

友の会規約の中に「美術館を支援する」という項目があります。今美術館は大変に困難な時代であり、これは非常に大切なことなのですが、なかなか目に見える形にはなりませんでした。それが今回、友の会から美術館に作品を寄贈するという形で実現でき、大変嬉しく思います。友の会の皆様の会費から、昨年度と今年度の予算を使って作品を購入し、寄贈することができました。

幸いに、森岡完介氏から素晴しい版画作品をご提供頂きました。今後できるだけ毎年少しづつでもこのような形で美術館を支援することができればと思います。そしていつかは展示室の一室が「友の会寄贈作品展示室」になれば、私たち友の会として大変喜ばしいことです。新収蔵作品展で、是非友の会で寄贈した森岡完介氏の作品をご覧ください。友の会四百数十名の皆様のお気持ちが、この作品のどこかに息づいていることでしょう。

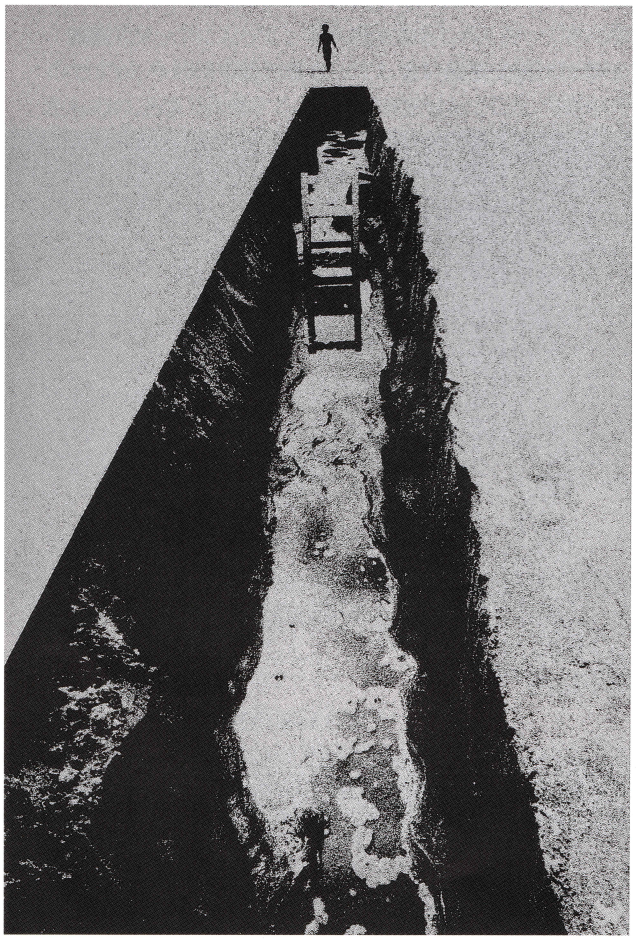
作家からのおたより

森岡 完介

この度、美術館・友の会のご好意によりまして、作品が収蔵されることになり、大変嬉しく光栄に思います。

作家は、作品制作とともに、作品が評価され、永久にコレクションされることが、何よりの励みであり、喜びです。友の会の皆様に心よりお礼申し上げます。

さて、人生は「出会い」によって、その方向が決まります。私は、30年前豊橋市の遠近則行（とおちかのりゆき）氏（刷り師）に出会い、以後、一緒に作品をつくり続けています。当時、私は中学校の教師でしたので、仕事は土曜日の午後と日曜日に限られていました。豊橋の工房は、まるで自動車



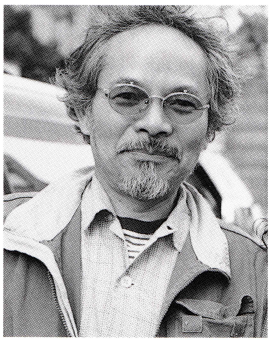
《人は何処へ 78-16》1978年
シルクスクリーン 85.0×57.0cm

レースのピットのようで、刷り師が待ち構え、ハイスピードで仕事を開始します。お互いに若い30代のはじめ意気盛んな時期でもあり、昼夜の突貫工事も平気でした。時間もお金もままならぬ私は、少しの版でいかに重厚な画面を作り出すかが課題でした。今思えば、ここまで継続できたのは、遠近氏の献身的な協力と、私自身が丈夫であったことです。とにかく作家は体力です。

私の版画について少し触れておきます。ご覧のように、写真をもとにしてつくられています。技法は、シルクスクリーンの写真製版法です。何枚かの版を使い、色を重ねて刷ってあります。但し、この風景は、創られた風景です。実際に海岸で砂を掘り、竹や板を並べて立てたり、椅子を置いたりするのです。

つまり、自然に対して、人間が行為し、その痕跡と自然が蘇生しようとする力によって生まれる風景のドラマの演出をするのです。何百枚もの写真は、カメラによるスケッチなのです。

なぜ版画をつくるのかとか、なぜベートーヴェンなのかという疑問は、またの機会があれば、お伝えしたいと思います。



森岡 完介氏

作家略歴

名古屋市出身
1964年　愛知学芸大学(現愛知教育大学)美術科卒業
1975年　本格的にシルクスクリーン版画を開始
1987年　第5回ソウル国際版画ビエンナーレ優秀賞受賞
1988年　第12回クラコウ国際版画ビエンナーレ国立美術館賞受賞
　　など

美術館から

愛知県美術館 館長　長谷川 三郎

<友の会>から美術館へ、美術作品の寄贈が実現いたしましたことは、まことに意義深い画期的な出来事といわなければなりません。美術館のさまざまな役割の中でも、時代の創造活動の成果である作品の収集・保存は、何にも増して大切なことです。この美術館の重要な活動に、一般市民の方々が寄与して下さることは、市民社会における美術館の位置付けが大きく前進することを意味しています。<愛知県美術館友の会>から愛知県美術館への作品寄贈は、社会における美術館のあるべき姿を他に先駆けて示しているのではないでしょうか。これは、寄贈作品の評価額という極めて現実的な事柄とは関わりのない、美術館と、美術を愛する人々の集まりである<友の会>の理念に属する問題だと申せましょう。

会員のすべての方々と、<友の会>の寄贈に加えて作家自ら自作をご寄贈下さいました森岡完介様に、心からお礼申し上げます。

お知らせ

美術館にとって重要な活動のひとつである作品収集が停滞気味の愛知県美術館にとって、平成13年度は美術館を支援しようという思いの方々によって予想以上に充実した年になりました。美術館友の会からのご寄贈を含め、全部で24点もの作品が寄贈されました。みなさんの美術館として支援していただけることが大きな励みとなります。この場をお借りして寄贈24点の寄贈者と概略をご紹介します。

寄贈者および作品　（五十音順）

愛知県美術館友の会（森岡完介作版画3点）
稲垣孝二氏（作家本人作素描2点）
木村定三氏（小川芋銭作日本画4点・前田青邨作日本画2点・須田剋太作油彩画等4点・横井礼以作油彩画1点）
土谷武氏（作家本人作立体作品1点）
名古屋名城ライオンズクラブ（稲垣孝二作油彩画2点）
三尾啓氏（三尾公三作油彩画2点）
森岡完介氏（作家本人作版画3点）

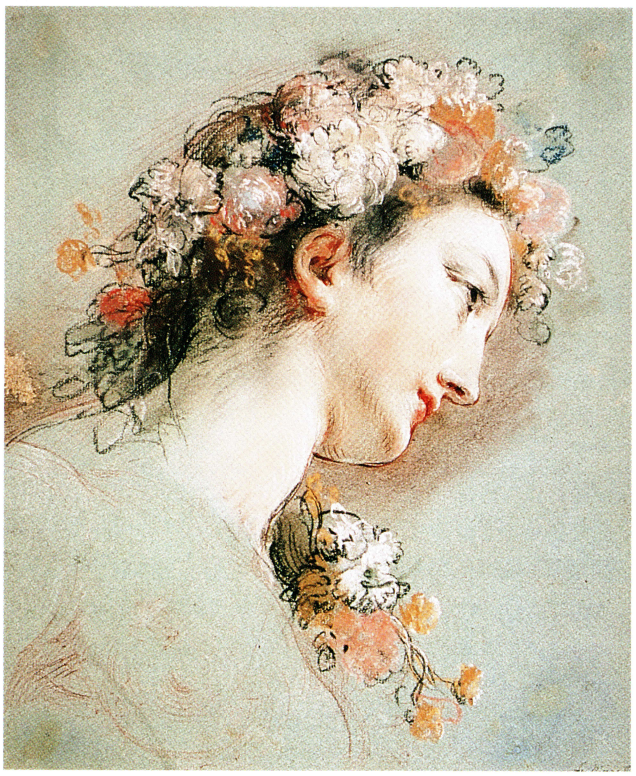
ただいま準備中…

大英博物館所蔵フランス素描展

The British Museum これをブリティッシュ博物館あるいはブリテン博物館などとは呼ばず、漢字で「大英博物館」と訳したのは誰なのでしょう。この呼び名に、ほかの海外の著名な美術館、例えばルーブル美術館、メトロポリタン美術館やエルミタージュ美術館とは違った、どこか誇らしげな印象を感じるのは私だけでしょうか。

今回ご紹介する「大英博物館所蔵フランス素描展」は、1996年に行われた「大英博物館所蔵イタリア素描展」の続編として企画され、16世紀から18世紀までの間にフランスで描かれた素描を中心に約100点が展示されます。素描展ですので単色の作品が大半ですが、中には下の写真のようにカラーのものもあります。カラーといってもパステルや色チョークによるものですので、派手さがなく落ち着いた作品が多いのが今回の展示の特徴です。

ところで、素描というと、下描きのことだと勝手に思い込んでいた私には、なぜそんな「下描き」程度のものが現在に至るまで大切に保存されてきたのか、疑問でした。そこで担当学芸員の栗田さんに伺ったところ、素描する目的として①画家自身が技を磨く為に練習で描く②絵の注文を受けた場合に、注文主との間でイメージを膨らませるたたき台として描く、のほか、ときには③素描そのものを作品として描くこともあるそうです。①や②のようにもともとは練習やたたき台として描かれた作品で、画家が修業していた工房や絵の注文主が保管していたものが、後に現れた素描愛好家に美術品としての価値を見いだされて、収集・保存されて今日に至っている場合も多いそうです。



フランソワ・ルモワーヌ《女神ヘベの頭部》1735年頃

さて、写真の作品はヴェルサイユ宮殿《ヘラクレスの間》の天井画の下絵として描かれたパステル画です。天井画なら、あまり近くで鑑賞されることはないのだから、と私だったらついつい横着してしまいそうですが、細部まで手を抜かずていねいに描かれているのには恐れ入りました。パステル画は、運ぶ際に顔料が剥落する恐れがあってなかなか貸してもらえないらしく、今回このような作品が借りられたのは幸運といえるでしょう。

スペースの都合で写真で紹介することはできませんが、この他にも人物画、風景画、野菜や花といった静物画、動物の素描、建物の図面など、展示される作品は多種多様です。これらの素描が、先に紹介した①〜③のどの目的で描かれたのか、想像してみるのも楽しいでしょう。

今回のフランス素描展は、5年前のイタリア素描展と同様、国立西洋美術館と共同で準備、開催されます。今回は愛知県美術館が幹事館で、今年が愛知芸術文化センター開館10周年にあたることもあって、準備には前回にも増して気合が入っているそうです。みなさんもぜひ足を運んで、その成果を自身の目で確かめにきて下さい。

（森）

2002年度　展覧会予定

＜大英博物館所蔵 フランス素描展＞
　2002年4月26日（金）　〜　6月30日（日）
＜韓国の色と光＞
　7月26日（金）　〜　9月23日（月・祝）
＜ミロ展1918-1945＞
　10月4日（金）　〜　12月1日（日）
＜中西夏之展＞
　12月20日（金）　〜　2003年2月23日（日）
＜時の贈りもの ― コレクション特別公開＞
　3月1日（土）　〜　3月30日（日）

私のこの一点

《丘の上の家》　　川上 実

もう40年も前のこと、留学生としてドイツに着いて間もないころに所用で訪れた炭鉱の街エッセンで、フォルクヴァンク美術館に立ち寄った。最初の大きな展示室の入り口で、遠くの壁面からひとり抜け出してくる一際強い作品に目を奪われた。それはセザンヌの《丘の上の家》という40号ほどの風景であって、この絵の周辺にはゴッホやゴーギャンがそれぞれ数点ずつ、ドランやマチス、それに表現主義の激しい色彩の絵が多数並んでいた。

それは東京ブリヂストン美術館のものに10年は先行する作品で、例によってキャンバスの白っぽい地塗りを残しながらうす塗りされた淡い緑と青、その中に明るい黄褐色の家が立っていた。画面は前方に飛び出しながら、奥へ深まり、額縁を抜けて左右へ、高みへと伸び広がっていく。おつゆ描きされた水彩画のようなその風景が、並みいる油彩画の中から激しく抜きん出てくる。なぜなのだろう、と真剣に画面に見入っていたことを思い出す。その後、セザンヌのより重要な作品に数々出会ったが、この驚きと疑問はいつも繰り返されて、今も変わっていない。

ケネス・クラークは、「絵の最初の印象を楽しむ時間はレモンの香りを楽しむほどの時間、私にとっては2分と持たない、その後は改めて画面の中に入って見ていく」と説いた。そこで私はセザンヌの作品の前ではレモンを数個用意することにしているが、その後で、好きな作品の鑑賞の際にしばしばするように、画面の構成やタッチや線を自分の目の筆でなぞり描いてみる。作品によってはこの再現作業で、自分なりに描き直してみたい衝動に駆られることもしばしばあるが、セザンヌの場合は無論惹かれてただただなぞるばかりだ。

セザンヌの多くの風景画は建築に似ている。例えばゴシック時代の大聖堂の内部建築、バロック寺院や宮殿のプランや階段の間など。人は強く惹かれてその内部へと惹き込まれ、その上で、作者の予定した導線を歩いて長い豊かな時間を費やすことになる。

ポール・セザンヌ《丘の上の家》1890-1892

私の惹かれる美術作品には二つの傾向があるようで、一つには例の再現作業で「足すことも引くこともできない」作品、そして画面の中をゆったりと逍遥できる作品である。二つを合わせ備える美術はほかでも数々体験してきた。日本庭園やその建築、山水画のなかに、また現代では例えばクレーや6,70年代の抽象画、ムーアの彫刻などなど。「私の一点」は、本当は複数形で考えたいところだ。

筆者紹介

長久手文化の家 館長
愛知県立芸術大学 前学長

会員のたより

～美術教育と美術館～　小林 克敏

私が美術に関わる進路をとり始めたのは、旧愛知県美術館で「クレー展」を見たことがきっかけであったように思う。1970年、高校1年の多感で何か生きる目的を探していた頃である。その展覧会は衝撃的で、美術の授業で学んだ知識では理解できないものであった。ひょっとしたら教えてもらっていたのかもしれないが、興味が無いというのはそんなものだ。なぜこんな絵を描いたか、と好奇心を刺激されわくわくして見ていた。無骨な太い線など子どもの絵のようだが、ていねいな塗り重ねや色の変化によって不思議な美しさが感じられる作品だった。それからクレーのまねをしてキャンバスの裏に絵を描いてみたり、『美術手帖』や『みづゑ』などを読み、訳の分からない現代美術に向けてまっしぐらになっていった。

クレーとくればカンディンスキー。デュシャンやクリストなどを知ったが最後「これなら自分も」と勘違いして芸術大学を目指すはめになった。その後、多くの画廊や美術館に出かけてはすばらしい作品に出会うことができた。大学では絵を描く意味をひたすら探すことになった。

中学校の美術教師となって肝に銘じたことは、多くの生徒は美術の専門家になるわけではないということである。しかし、作品から感じとる心や、「どうしてこのような作品を造ったのだろう」と考えるきっかけを「たね」のように植えておくことが大切なのだと思う。

もちろん手の巧緻性や絵画技法の技術的な面を高めることも重要だが、それは自ら望むことで高められる力であろう。自分の経験から考えると、基本は「好きこそものの上手なれ」といったところだと思う。

これからの学校教育の中では、こうした自主性を大切にする学習が一層多く取り入れられるようになってくる。「総合学習」という授業は、教科の枠をなくして子どもたちが自主的に学習を広げたり深めたりしていくものである。調べ学習や経験を通して学んでいくことが中心となっていくので、資料や経験の場を準備することも大切になってきている。

そこで、私としては「美術館」という貴重な経験のできる場所が、総合学習に大きな役割を果たすことができ

るのではないかと考えている。作品の鑑賞をもとに、その時代背景や風土などに学習を広げることができるからである。作家のことを調べていくことで国際的な理解を深めたり、作家自身や関連した人々の心情を深く考えたりするなど、興味をもって学習を進めていくことにも大きな期待がもてそうである。

先日も数十人の小学生が県美術館を訪れて作品を鑑賞していた。総合の学習では、学校を離れて見学することや、教師以外の人から指導・援助を受けることなどが期待されている。昨年末の懇親会で、館長さんから「ひろがり」がキーワードであるというお話があり、学校教育との関連をイメージさせていただいた。中学校の美術教師としても、美術作品の鑑賞に少しでもたくさんの人が興味をもち、美術館に足を運んでもらえるような美術教育をすすめていきたいと考えている。絵をどう見るか、人によって違うけれど、「絵はわからないから…」と言う大人になってほしくないのである。

愛知県美術館 素顔の扉を開く

～第三の扉 「クーリエ(作品随行員)」～

この美術館活動を紹介するシリーズでは、今回“保存”をテーマとする予定でした。しかし、ニューヨークで起こったテロ事件の余波が、愛知県美術館にも及びました。

そこで、村田主任学芸員にその事例を通してクーリエ（作品随行員）について急きょご紹介していただきます。

昨年9月11日、ニューヨークなどを襲った同時多発テロの直後、アメリカの空港が閉鎖され、多くの旅行者が足止めされたり、旅行のキャンセルが相次いだのは、いまだ記憶に新しいことです。愛知県美術館でも、このテロ事件のために大きな影響を受けた仕事がありました。ここではそのご報告を通じて、一般にはあまり知られていない学芸員の仕事をご紹介したいと思います。

あのテロが起きた時、オタワにあるカナダ国立美術館ではグスタフ・クリムト展が開催されていました。当館からも、皆さんよくご存知の《人生は戦いなり（黄金の騎士)》を貸出していました。展覧会は9月16日に終了する予定で、作品の返却スケジュールが既に決定していました。その概略は、私がクーリエとして9月15日夜にオタワに入り、17日には作品を点検し梱包を確認し、当日のうちにニューヨークのケネディ空港に陸送して、翌18日未明の貨物便に積み込み、私が同乗のうえで成田まで空輸するというものでした。クーリエとは、展覧会での作品貸出しの際に総ての作品の移動に付き添い、必要な点検や確認の仕事をする人のことです。このクリムトの出品にあたっては、貸出しの時には牧野美術課長が作品の移動に立ち会い、展示するまでの点検、確認を行なっていました。そして返却を受けるためにクーリエとして私が日本を発つ4日前にテロが起こってしまったのです。

作品をできるだけ早く安全に日本に戻すために、すぐに行動を起こす必要がありました。閉鎖されたニューヨークの空港が再開される見通しなどまったく立っていません。まず、私たちは当初のスケジュールを総てキャンセルしたいという連絡をカナダ国立美術館に伝えました。先方の対応も大変迅速かつ適切なものでした。ただちにキャンセルに同意する旨のファックスが届き、さらに損害保険の契約期間延長のことなどにも対応する用意があるとの連絡が入りました。作品貸出担当の拝戸学芸員が連絡調整役となって、カナダの美術館、日本とカナダの美術品輸送業者、館長以下の美術館のスタッフ、保存担当の長屋学芸員などとの協議と連絡が続けられました。私たちはニューヨーク（アメリカ）を経由しないで作品を日本に運ぶ方法を検討しました。しかし、現状の梱包木箱では、大きさの関係から貨物便でしか運ぶことができません。さらにクーリエの同乗が許される貨物直行便はニューヨークからしかありませんでした。そこで総合的な安全性の確保という観点から、作品を梱包する木箱を少し小さいサイズに作り直して、カナダのトロントから成田に直行している旅客便の貨物として運ぶという方法を選択することにしました。これなら私が作品に付き添って、アメリカを経由することなく日本に運ぶことができます。カナダの美術館からは、速やかにその方法に同意するという返事がもたらされました。箱も先方の美術館で新しく作ってくれるとのことでした。

カナダ国立美術館で新しい木箱に作品を納める

総てのスケジュールを新しく組み直し、当初の予定から9日遅れでカナダに向うことが決まりました。9月24日成田発トロント経由でオタワに当日夜遅く到着。翌日、オタワの美術館の荷解梱包室で作品に久々に対面し、す

ぐに状態点検を済ませ、美術館の梱包担当スタッフが新しく作ってくれた木箱に収めました。翌日はトロントまでの陸送です。朝8時過ぎに関係スタッフが集まり、作品を美術品輸送専用トラックに積み込み、経路とスケジュールを確認後出発。私は警備車に同乗しました。警備車はトラックの直ぐ後ろに付き、定められたチェックポイントを通過するたびに、美術館に確認の連絡をしていきます。ほとんど休憩もとらず午後3時過ぎにトロントの美術館の一時保管庫に搬入を終えました。そして翌早朝にはトロントの美術館から作品を搬出後、空港の貨物ターミナルに向い、作品の引き渡しに立ち会いのうえで、機内への積み込み方法などを指示確認しました。こうして予定通りトロントを発った飛行機は、日付変更線を超えて9月28日の夕刻に成田に無事到着、多くの関係者の協力が、貴重な美術作品を後世に伝えていくということを実感できたクーリエの仕事でした。

（愛知県美術館主任学芸員 村田真宏）

表紙の作品は森岡完介（1941-）《 Beethoven at the beach-Message 86-11N 》（1986）。今回友の会より愛知美術館へ寄贈した3点の作品の１つ。所蔵作品展示室の新収蔵作品展でご覧になれます。

事務局から

平成13年度の友の会の活動は、これまで理事会等で話し合われたことをいくつか実現することができました。

第一に会員の皆様のご支援による作品の寄贈です。新収蔵作品展でご覧いただけたかと思いますが、作品の感想はいかがでしたでしょうか。

そして、美術館の協力により、休館日にも開催するようになった友の会会員のための特別鑑賞会。また、「学芸員と語ろう」と題しました連続講座の第一回の開催です。

今年は理事会においても活発に意見交換がなされ、会員の皆様にも懇親会、講演会、コンサート、講座とたびたび来館していただく機会が増え、美術館を身近に感じていただけたのではないでしょうか。

編集スタッフから

編集スタッフに入って１年半、段々おもしろくなってきた所なのですが、今号は卒論と重なってしまい編集会議には参加したものの、あまり活動することができませんでした。今後も参加できるかと不安でしたが、無事岐阜の学校に進学が決まり、続けてスタッフとして参加できることになりました。

これからも皆さんに楽しく読んでいただけるような会報づくりを目指してしていきたいと思っています。（伊奈）

今回は、「作家からのおたより」を森岡さんに、エッセイ「私のこの一点」を川上さんに、「美術教育と美術館」を小林さんに寄稿して頂きました。また「大英博物館所蔵 フランス素描展」を栗田学芸員にお伺いし、「クーリエ」を村田学芸員に紹介して頂きました。ご協力ありがとうございました。

編　集　水野 愛子／杉山 博之／森 健次
伊奈 由希子／安井 智子／湯田 文
協　力　愛知県美術館企画普及課

発　行　2002年3月
愛知県美術館友の会
〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2
愛知芸術文化センター内
Tel 052-971-5511（代表） 内線347
Fax 052-971-5604
e-mail:tomonokai@aac.pref.aichi.jp
美術館ホームページ:
http://www-art.aac.pref.aichi.jp/

デザイン／レイアウト　小島 篤／鈴木 彩子